

「自己とは何か」の問題 柳田敏洋 SJ

エヴァン・トンプソン (ET)『仏教は科学なのか』(藤田一照監修、護山真也訳、Evolving, 2024) **マインドフルネス仏教批判**

[涅槃のパラドクス]

- ・解脱は不可能である。だがそれは達成される。(ロバート・シャーフ)
 - ・解脱＝涅槃(因果という条件を超えた状態)
 - ・輪廻＝条件づけられた存在の循環
 - ⇒両者には根本断絶がある。仏道修行という原因の結果として解脱(涅槃)に達することは不可能。
- ・ナーガールジュナ(龍樹) (2C. 中観派「空」の立場)
 - ・「輪廻と涅槃に区別なし。両者に僅かの隙間もなし。」
 - ⇒涅槃(仏性)は最初から自己の内にある。

(ET)「なぜ我々は悟っておらず、悟りの認識がないのか」

(Y)「誰が悟るのか?」自己の二重性の問題が落ちている。

⇒エンスの「私」で解脱が生じるのではなく、エッセの〈私〉において

1

「自己とは何か」の問題

[仏教は無我説か]

- ・ブッダの態度「肯定も否定もしない」(無記 魚川)
- ・自己は五蘊(色受想行識)には存在しない。
- ・仏教の無我説は同一性の原理を欠くため「何が人を人たらしめているかうまく説明できない。」
- ・「神経科学や心理学は無我の真理を裏付ける」⇒要検討(脳は自己という錯覚を生み出すが、脳の中に自己は存在しない)

[エヴァン・トンプソンの認知哲学からの立場]

「自己は構築されたものである」(The self is a construction.)

「自己とは行為によって私を創造(enact)する進行中のプロセス」

(Y)「構築された自己」の真理判断は誰がするのか。

もし自己が「構築されたもの」なら現象世界で変化してやまず、真理判断はできない。現象を俯瞰できる超越の〈私〉が必要

2

ペルソナ(人格)について

1. ペルソナ(人格)の中心

1) “私そのもの”としての〈私〉

- ・〈私〉の特質＝自己還帰的「一」(稲垣良典『人格の哲学』2009)
- 自己還帰的とは、自分に気づくことのできる自分。
- 「一」とは、真の意味での唯一で独自の存在のこと。

2) 他者に関わった〈私〉

- ・〈私〉は本質的に他者への開けにある
- (参照:トマス「神のペルソナとは“自存する関係”」)
- 〈私〉は無に過ぎないがエッセへの開けの中で、あらゆるものの交点としての交わりに関わっている。

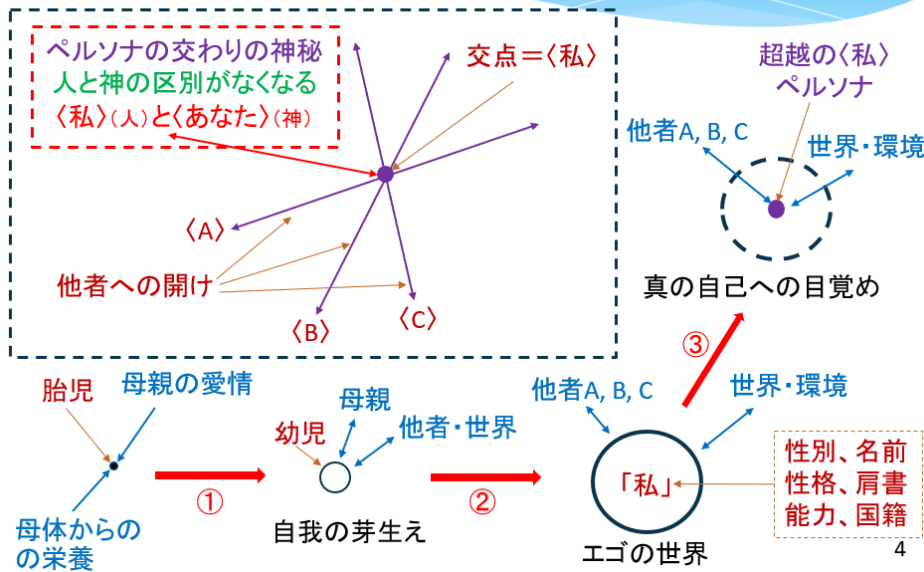
2. ペルソナ(人格)とは「超越の交点」(transcendental inter-be)

- ・〈私〉の自覚は他のペルソナである〈あなた〉との交わりによって生じる。⇒ペルソナである母親の愛は外見を超えて、子どもの内なるペルソナの〈私〉に向かう必要がある(所有価値から存在価値へ)

3. 真のペルソナは愛が「Being」から「BEそのもの」へ向かうなかで成る。

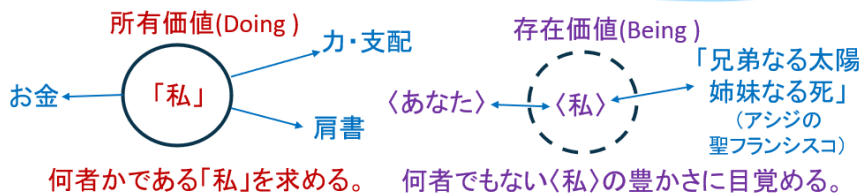
3

交点としてのペルソナのイメージ



受肉のイエス・キリストの神秘

1. エゴの「私」とエッセの〈私〉



何者かである「私」を求める。 何者でもない〈私〉の豊かさに目覚める。

2. 受肉のイエス・キリスト

存在価値を身をもって示した。

- ・社会の底辺の人々との連帯により、存在価値の豊かさ(神の国)を示した。人々を「私」から〈私〉へ目覚めさせる。
- ・十字架(神に呪われ、見捨てられた者)の死: 存在価値の徹底の極み。エンスにおける虚無・不条理を引き受ける無の〈私〉。
- ・復活の神秘: 所有価値を超える存在価値の豊かさ(神の命) ⇒ 生死を超える〈私〉に働く神の命と愛の豊かさ

キリスト教における救い

